

げて、町で新しい生活を初めた次の娘は、やりきれなくなつて、年子としごに出来た二人の子を抱へて戻つて来た。唯一の財産とも云ふ可き一匹の飼牛は、賣る間際になつて急に死んだ。隣り村の小百姓に嫁附かまついた長女——三十までも家にゐて、家の爲めに働いた一番孝順な、をぢさんの最も力にしてゐた娘が、初産で死んだ。つゞいてをばさんも、死んで了つた。をばさんは、何人でも人の顔さへ見れば、死んだ娘の事を話し出して、泣き口説いた。その悲みが、身體を傷めたのであらう。風邪がもとで、肺炎になつて、一週間ばかり病んで死んだのである。

『あの時は、をぢさんも笑へなかつた。笑ふのに骨が折れた。』

私の家の者はさう云つて話した。あの時から、めつきり、元氣が無くなつて了つたのださうである。勿論、年齢の所爲もあらう、何しろ、をぢさんはもう六十を踰えてゐたんだから。けれどもをぢさんは、強ひても元氣を振起さねばならぬ地位にゐた。息子が未だ若いので、をぢさんは一家の支へ柱として、すべての責めと務めとを負はねばならなかつたのである。をぢさんは働かねばならぬ、戦はねばならぬ。斯くて、をぢさんは聲をふり絞つて笑はなければならなかつた。——此の前をぢさんを訪ねた時は、をぢさんは未だ笑ふ事を忘れなかつた。

「どうだな、東京は？——どうも田舎の方はいよ／＼駄目だぞい。百姓の乾物が出来るが、どうだい？　なんぼ東京にだつて、百姓の乾物の買手はあるまいな。は／＼。」

こんな事を云つて笑つた。——けれども、もう今は笑はなかつた。言葉附にも、既にあの反抗的なところはなくなつた。じつと頭を垂れて、たとへば審判の廷に引出されでもしたやうな様子をして「へい／＼、」と妙に改まつた調子で私の言葉に答へるのであつた。

「どうもいろ／＼不幸が続いてな。俺はこんな風だし、平作(をぢさんの息子)の奴が中々骨が折れます。これからは萬事面倒をお願い申し度いで。」

「へい、どうあがいたつて、かういふ時勢ぢや仕方が無いでな。もう俺あ、何にも構はずにぢいツとかうしてゐたより外あ無え。」

木の根のやうな瘦せた膝頭の出たのをかき合せながら、寒さうに小さく坐つたをぢさんは、いんみりとした調子でこんな事を繰返した。重く垂れた額の、艱苦の痕を刻む深い皺！——それでも私の心には未だ、だしぬけに、をぢさんがその顔を振あげて、大きな聲で笑ひ出しはしないかといふやうな期待があつた。けれども、をぢさんはもう笑はない。

「あゝ、をぢさんは笑はなくなつた。もうをぢさんは死ぬんだらう！」さう思ひながら、私はをぢさんの家を辭した。

## 三

最近に受取つた便りによれば、をぢさんは床につきゝりで、もう長くはあるまいとの事である。私は、あの崖の下の小さい藁葺屋根の下の、ろく／＼日も當らぬやうな煤け障子の蔭に、ひとり病んでゐるをぢさんの姿を心に描く。貧しい忙しい周囲は、病んでゐる人を心に置くほどの餘裕を有つてゐない。をぢさんは、恐らく何人からも深く顧みられないで、淋しく病んでゐるのであらう。かういふ私でさへ、是非一度見舞はうと思ひ乍ら、つい／＼忙しさに紛れて、まだそれを果してゐない。生きて働く時、多くの人はその人に縋つた。しかも死んで行く時は、誰が、その人を愛み惜まう！ 人々は唯現在に苦しく、現在に忙しいのである。

「××のをぢさんが弱つて了つたんで、此の部落あ恰まるで火が消えたやうだ。」と村の若者達の一

人は云つた。實際あの「面白いをぢさん」の哄笑の聲の聞かれぬ村の朝夕はいかに淋しからう。

併し、笑はなくては一日も暮してゆく事の出来ぬ彼等である事を私は知つてゐる。私の見るところによれば、村の人々の十中の七八までは、皆、をぢさんと同じ性質の悪諍家譏笑家である。皆、ひげはとらぬ好個の笑ひ手である。槽の火の燃ゆる村の爐邊からは、いつも、粗野な高笑ひの聲が響いてゐる。彼等は皆笑ふ。今笑はぬものも、やがて笑ふであらうし、今笑はなくなつたのも曾ては笑つた。彼等の笑ひのないところに、彼等の生活無いのである。私は、をぢさんの事を語つた。それは、村の人々を代表する一個の典型として語つたのである。をぢさんは、最もすぐれた笑ひ手であつた、けれどもをぢさんばかりが笑ひ手では無い、彼等は皆笑ふ、彼等は笑ふことによつてのみ生きてゐるのである。

而して、彼等の笑ひが何を意味するか。

彼等の笑ひは、自棄の笑ひである。切迫せつぱつまつた笑ひである。苦しみのあまりの笑ひである。自己欺瞞の笑ひである。笑はなければ生きて行けないから、仕方がなしに笑ふのである。更に、その笑ひによつて、己を嘲り、己の運命を嘲ける事によつて、彼等をかくまでに苦しむる何も

のかに逆襲し反抗してゐるのである。そして、唯そこからのみ僅かに生きてゆく勇氣と力とを偷み得るのである。

しかし、彼等は、決して、しまひまで笑ひとほす事は出来ない。我が愛するをぢさんはとうとう笑はなくなつた。笑はなくなつた心の空虚と寂寥とはどんなであらうか。私は、あの崖下の家で、一人死の床に横はつてゐるをぢさんを想ひやらずにはゐられない。而して、問題はただをぢさんの上のみは係つてゐない。かういふ私自身も亦、唯笑ふ事によつて一時をなぐさめ、一時を勇氣づけてゐる人間の一人ではないか。

## 四

Tといふ天折した作家の或る作品を評した時に、作家のN氏はこの問題に觸れてゐた。N氏は、日本に於ける唯一とも云ふ可き郷土藝術家で、よく地方人の生活に通じてゐる人である丈に、流石に、眞髓に徹した物の觀方がしてあつた。その作が、悪病に呪はれて、子も孫も死に

盡した一家の最後に、一人残された老人の、次第に皮肉的になつて行く心持を描いたのに對し、そこに日本國民の悲しむ可き缺陷がある。彼等はかういふ時に祈る可きたよる可き神を有たないのだ。どうかして、我々は、この缺陷を充たさなければならぬ——かうN氏は云つてゐた。

をぢさんがさうであるやうに、少なくとも私の郷里の地方に於ける農民はさうである。私の郷里の地方に於ける農民がさうであるやうに、おそらくすべての日本の人がさうであるのではなからうか。彼等は、信ず可き何ものも有たなければ祈る可き何ものをも有つてゐない。彼等はたゞ泣く事を知つてゐる。しかし、彼等は——しばらく、彼等といふ意味を局限して、あの貧しい農民達は——泣く丈の餘裕をさへ有つてゐない。彼等は泣かうとして、而して笑ふのである。彼等は號哭する代りに哄笑するのである。

ツルゲエネフの散文詩の中に、「キヤベツ汁」と題した一篇がある。或る百姓の寡婦が、二十になる、働き手の一人息子を失つた。村の地主の奥様は、此の不幸を聞きつけて葬式の日を訪ねて行つた。女房はその時、食卓に向つて、眞黒になつた鍋の底から、薄いキヤベツの汁をすくつて、しきりにそれを飲んでゐた。「まあ！」と奥様は思つた。「こんな時にもまだ食べてゐられる

なんて……この人達は何て感情が荒つほいんだらう！」而して彼女は、自分が幾年か前に生後九箇月になる娘を失くした時、悲しさのあまり、ペテルブルグの近傍にある大好きな別荘にも行かないで一夏市街で過した事を思ひ出した。而して、云つた。「まあ！ 驚いた！ お前まあ息子の事を思はずにゐられるのかえ？ こんな時にやつぱり物が食べたいのかえ？ どうして汁なんか食べてゐられるだらうね！」女房は「家のワアニヤは死んぢまひました」と小聲で云つて悲嘆の涙をその瘦せた頬に流した。而して云つた。「もう私も死んぢまひさうでございます、もう此胸をかきむしられるやうでして。でも、汗はうつちやらかして置いちや勿體なうございます。これには鹽が入つとりますから。」

まことに悲しむ事は、泣く事は、一種の贅澤に過ぎない。悲しみ泣く事によつてその營養不良の身體の力を消耗することは、彼等には許されてゐないのだ。彼等は笑ふ。笑ひの昂奮によつて彼等は彼等の苦しき生命の喘ぎを續けてゐるのである。

日本人ほどよく笑ふ國民はない、日本人は、陰鬱なくせによく笑ふ、笑はないでいゝ時にまで笑ふ、これは日本人の淺薄を證據だてるものに外ならない——といふやうな議論を何かで見

た事があつた。淺薄か！ 淺薄とすれば實に悲しむ可きこの淺薄よ！ 日本人中の日本人たる江戸の市民は誠によく笑ふ人々であつた。十返舎一九を生み、式亭三馬を生み、「八笑人」「和合人」などを生み、あの落語といふ世界に類のない民衆藝術を生んだ江戸の市民は、誠に笑ひに生き笑ひに死んだ人々である。しかし、江戸の太平は、彼等の笑ひを軽いユーモアにした。現代の窮迫せる物質的生活は、彼等の笑ひを毒々しい惡辣なものにせずにはゐない。彼等は——私は今、暫く、彼等といふ言葉を、私のよく知る私の郷土の農民にのみ限定する——皆はげしい譏笑家である、惡諺家である、彼等は泣くやうな聲をあげて哄笑する。そして、私自身も亦彼等の中の一人ではないのか。私もまた胸を衝いて迸り出ようとする、私の内部に渦まく哄笑の聲を感じる……。

(大正六年)

卓  
上  
小  
閑

卓上小閑

私の「お伽噺」

二人の子供が居りました。その二人の子供の前に神様が出て来て、一人の子供には小判を呉れました。一人の子供には鍬を與へました。鍬を貰つた子供は、小判を貰つた子供を羨んで、神様の片手落を怨みました。すると神様が云ひました。——私は、こんな風のお伽噺を書かうとした事がある。神様は、いや／＼お前は鍬の價值を知らねばならぬ、鍬は小判のやうにすぐお前の役には立たないが、力を揮つてその鍬を土に打ち込め、而して大地を耕せ。お前は多くのものをそこに穫るであらう。さう神様が諭すのだ。まあそんな風のお伽噺なのだ。

此の二人の子供のうちで、私などは明かに鍬を貰つた方、鍬黨なのだ。藝術家としても、又

單に人間としても、すぐ役に立つ小判のやうな天分は恵まれてゐないのだ。貰つたものは鉄なのだ。だから、努力して土を掘りかへさなければ、どうにもならないのだ。

もう十年も前に、或る文學雜誌で、文壇の諸家に、藝術製作に必要な條件といふ問を發した事がある。その答へにはいろ／＼あつたが、中で、慥か木下杢太郎氏であつたと記憶する、贅澤、怠惰の二つを擧げてゐた。

贅澤と怠惰とを縁として生れる藝術。その頃猛烈な唯美主義者だつた杢太郎氏の藝術觀から云へば、藝術とはなるほどさういふものかも知れない。本當の傑作といふものは苦心から生れるものではない、ゴツゴツとした努力から生み出されるものではない、すらりと自然に出來あがるものである——私はまた斯ういふ意味の事を、訪問記者をしてゐる時分に、岡田三郎助畫伯から聞いた事がある。其時、あの顎の先にしよぼ／＼と鬚を生やした、前齒の抜けた、血色のよくない、しかし、いかにも藝術家らしい高貴な感じのする温乎しとて玉の如しとでもいふやうな畫伯の風半に見入りながら、私は、なるほどさういふものかも知れないと思つた。而して、一箇の藝術苦學生であつた自分自身を省みて、聊か心の寒きを覺えたことがある。

外の事は兎に角、藝術だけは、畢竟天分の問題だ。天分がめぐまれてゐない以上、逆立をしたつて、とんぼがへりをして見たつて、どうにもなるものではない。私はさう思ふといつてもひどく憂鬱になつた。

だが、私は、近頃では、負惜しみかも知れないが、おれにだつて天分はあるんだ、唯、その天分が小判でないだけだといふ一つの信念に到達するやうになつた。生れながらに具はつたすぐに使へる何ものかは自分にはない。神様から小判は貰つて來てはゐない。けれども、鉄は貰つて來てゐる筈だ。一生懸命に汗みづくで此の鉄を打ちこんだら、何か收穫が出來るに違ひない——さう、今の私は考へるのだ。

而して、——すこし蟲のいゝ考へかも知れないが、たとへばゾラのやうな鉄黨の大家が文學史上に決してすくなくはない。いや、トルストイだつて、ユーゴーだつて、小判よりは鉄の方だ。彼等の藝術は、決して贅澤と怠惰の中から生れたものぢやあ無い。すらりと出來たものぢやあ無い。皆、苦心と努力との賜なのだ。——そんな風に考へる事によつて、私は大に勇氣づけられるのである。

私のこの考へが、どんなに愚かなものであるにせよ、どんなに辻褃の合はぬものであるにせよ、請ふ君よ笑ふこと勿れ。私には、是非斯う考へなければならぬ必要があるのだから。これは宇野浩二氏の言葉で云へば、全く一つの「お伽噺」であるかも知れないが、お、何と人間にはお伽噺が必要であることか！

### 「方丈記」その他

大地震があつた日の二三日後、神樂坂の本屋の店頭に立つてみると、中年の紳士が、小僧に「方丈記」は無いか？ と聞いてゐた。ホウジヨウキ？ ホウジヨウキ？ 小僧はしきりに首をかしげて問ひ返してゐた。

「方丈記」は、地震の生んだ文學の一つ——といふよりも、地震の生んだ唯一つの文學だ。勿論、長明に此の記を書かせたのは地震ばかりでは無い。いろ／＼一身上の都合が思ふやうに行かないのも、彼の厭世の動機だつたらしい。鴨神社の神主になれなかつたので、その不平で世

に背いたといふのだから、長明といふ男は、思ひ切つて量見の狭い、まあ、小人とも云ふ可き人物だつたらうと思ふ。「方丈記」一篇の感慨は、いかにも女性的で、常識的で、文章としては兎に角、藝術品としては、たいしたものでも無いやうに私は思ふ。

元暦幾年かの大地震は、長明をして日野の山奥に方丈の庵を結ばせたが、大正十二年の地震は日比谷だの上野だのに、幾千萬の方丈のバラックを営ましめてゐる。我等の「方丈記」——久米正雄氏のいはゆるバラック文學は、獨逸直傳の表現主義でゞもあらうか？

新井白石の自叙傳「折り焚く柴の記」の中にも地震が書いてゐる。「方丈記」の女性的な感慨に終始してゐるのであるに對し、白石のそれは、いかにも男性的で、しかも靈活な描寫となつてゐる。地震文學として、人は「方丈記」あるを知つてゐるが、白石の此の文章には氣がつかない人が少なくないやうだ。

かくて走する程に、神田の明神の東門の下に及びし頃に、地またおびたゞしくふるふ。ここの、あき人の家は、皆々打あけて、おほくの人の、小路にあつまり居しが、家のうちに燈の見えしかば、火こそ出べけれ、燈うちけすべきものをと呼ばはりてゆく。昌平橋のこな



たにて、景衡の我かたに走せ来るにゆきあひて、あとのことよきにはからひ給へといひすててゆく。橋を渡りて南にゆきて、西に折れてまた南せんとするところに、馬をたてゝあるものを、月の光りに見れば藤枝若狭守なり。

こんな調子で書かれてある。精悍な、遒勁な、弾力に富んだ『折り焚く柴の記』の文は、この地震の一段に至つて、殊に精彩を帯びて居るやうだ。精彩を帯びてゐると云へば、久保田万太郎氏の話だ。今度の遭難談はいろくの人からきいたが、久保田氏が一番面白かつた。話し方がいかにもうまいのだ。而してこんな事を云ふと叱られるかも知れないが、久保田氏の話振の中には、さういふ災難そのものをさへも、藝術的感興の中に享樂してゐるといつたやうな心持が、つまり、江戸の花だと云つて火事を自慢した江戸つ兒の心持が、はつきり見てとられたやうな気がした。

## お七

地震から火事、火事からお七を思ひ出した。お七はさまざまに描かれてゐるが、何と云つてもあの『好色五人女』巻の四の、西鶴の物語にとゞめを刺す。

西鶴のお七で感服に堪へないのは、十六歳の少女の内生活を、心理的乃至生理的に、十分に描破しつくした點だ。

メレジュコフスキイが、トルストイを評した文の中に「靈肉の分化」といふ言葉があるが、女の十五六、男の十六七は正にその靈肉の分化のはじまる時だ。それまでは、たゞ混沌として一つに融け、何の不調和も矛盾もなかつた靈と肉とが、今や、靈は靈として芽を出し、肉は肉として芽を出し、互に異なつた方向にのびてゆく。人間の苦悶はこれからはじまるのだ。

お七が焼け出されて、吉祥寺の假のやどりに、肌寒からうと住持が出て呉れた小袖をとりあげて思ひ沈む一條がある。西鶴は次のやうに描いてゐる。「中に黒羽二重の大ふり袖に梧桐杏のならば紋、もみうらを山道のすそ取り、わけらしき小袖の仕立、焼かけのこりてお七心にとまり、いかなる上臈が世をはやうなり給ひ、形身もつらしと此寺にあがり物かと、我年の頃おもひ出して哀れにいたましく、あひ見ぬ人に無常おこりて、思へば夢なれや何事もいらぬ世や

後生こそまことなれと、しほくとしづみ果て——。」この相見ぬ人に無常おこりて——といふ心持に、お七の靈のめざめが語られてある。思へば夢の世や、何ごともいらぬ世や、後生こそまことなれ——といふ心持、そこに永遠に對するあこがれがある。つまり、宗教的な要素がある。而して、お七の靈の眼覺めは、同時にお七の肉の眼ざめであつたのである。

總じて、少女期の終り、處女期のはじめの動搖し易く驚き易い心的状態は、將に分化せんとする靈肉の危い抱合が、その危きまゝを尙ほ保たうとするに就いての異常な敏感に原因する。而して、お七の場合に於ては、火事といふ外的刺戟が、火事といふ變事によつて惹き起された心の動搖と驚きとが、その分化の最後の誘因になつたと見る可きであらう。火事はお七の家を火にした。而してお七のこゝろを火にした。お七に無常を教へたその避難所は、またお七に初恋のシンを與へた。お七の戀が吉祥寺といふ寺院を背景としてゐる點、最も興味が深い。

更に西鶴は、お七の最後について、「此女思ひ込みしことなれば、身のやつるゝ事なくて、毎日ありし昔の如く黒髪を結ばせてうるはしき風情」とも書いてゐる。「最後ぞとすゝめけるに心中更にたがはず、夢まぼろしの中ぞと一ねんに佛を念じけるこゝろざし」とも書いてゐる。悔

いもせず、嘆きもせず、微笑して十字架の上に死んだお七の死は、寧ろ莊嚴である。

肉を通じて靈を見たお七は、肉の中に靈を攝取したのだ。肉即靈、戀即宗教、刹那即永遠、——メレジュコフスキイの理想したいみじき象徴の世界を、お七は磔刑の柱の上に啓き示したのである。

西鶴は、勿論、そんな事を意識して書いたのでは無からうが、西鶴のお七は、いろくの暗示を我々に與へる。

お七と共に思ひ浮べられるのは、近松の描いた『心中萬年草』のお梅といふ少女だ。戀と無常のうらおもて、十六七の娘の同じやうな心的過程は、西鶴ほど深刻にはないが、近松も亦かなりよく描いてゐる。

## 口 笛

此頃、『啄木歌集』を讀むと、その中に

夜寝ても口笛吹きぬ

口笛は、

十五の我の歌にしありけり

といふ歌があつた。此の歌は、私に、私の寂しい少年時代を思ひ出させた。孤獨を愛する事は私の性である。村の小學校に通ふにも私は友達の群に交らずに、あの長い野の道を一人で往來した。初夏の日のあまりに明る過ぎる淋しさに、麥笛を作つて、高く鳴らし乍ら歩いた幼い日の記憶は、今も、あの麥の莖の甘いやうな淡い刺戟性の味覺と共に鮮かに私にのみがへつて來る——。やがて、もつと底深い淋しさが、幽かな口笛となつて唇に上るやうになつた。まことに「口笛は十五の我の歌」であつた。私はよく口笛を吹く少年であつた。(その癖は、今でも未だ残つてゐる。今でも私は、自分の口笛に氣がつく時、とりとめもない或る淋しさのうちにさまざまうて居る自分を見出す。)

やがて、口笛でまぎらす事の出來ぬやうな淋しさが來た時、私は文章を作る事をおぼえたと云つてよい。私の十六七から二十歳位までの長い投書家時代(?)は、かうして初められたのだ

と云つてよい。淋しさに口笛を吹く心持——私の投書をした心持はこれである。

もとより、その時分から、文筆で口に糊するやうな身にならうとは、望んでもゐず、豫期し<sup>て</sup>もゐる無かつた。粹が身を喰ふと云ふのか、それとも藝が身を助くとでもいふのか、誤つて、こんな身の上になつた。事の経緯を考へると、一種の感慨無きを得ない。而して碌々として年を経て、一時代も二時代もあとの若い人達の投稿を手にして、あやしげな選者振を示す自分を顧みると、實際、「慚然」とでもいひたいやうな妙な氣持になるのである。

私は、多くの投稿を読んで行くうちに、至るところに過去の自分の姿を見出す。私は、その文章の、文章としての巧拙とか、作としての出來榮とか、そんな事よりも、先づその作者の境遇とか心持とかを思ひ浮べる。どんな境遇に居る人であらう。どんな心持でゐる人であらう——さういふ點が、最も強く私の心にアッピールする。

而して、私は、投書などをする人は、皆、屹度、過去に於て此の私がさうであつたやうに、孤獨な、淋しい、不幸な、不如意な境遇にある人であるやうな氣がする。空想的な、憧憬的な、何かしら現在に不満足な人であるやうな氣がする——さう言へば、文學に親しむ者は皆さうなのに定つ

てゐる、と人は云ふかも知れない。勿論、さうである。が、私は、特に「その中でも投書などをせず居られぬ人は」とつけ加へ度いのだ。すべての投書は、淋しい心の訴へである——私の投書家に對する愛撫のおもひは、此の一點にかゝつて居る。

文章の雑誌に關係してゐる私は、世の多くの少年達を、文學といふ甘い餌で釣り寄せることについての、各方面からの非難を聴く。それは明かに一種の罪惡だ。人の子を過まるものとさへ言ふ者がある、果してさうであらうか。

机上にうづ高い投書の原稿を見て、その大部分が、全く紙屑籠に葬られるより外にしかたのないものであるのを見て、「これは何といふ浪費だ！ 何といふ無益の營みだ！」と、坐まゐに心を寒うする事もある。これ丈けの努力と苦心と時間とを、他の事にもつて行つたら、と思ふ事もある。が、考へて見れば、これ等は總て歌だ、口笛だ。これ等の文章は、書かれた事によつて、すでに其の用を遂げてゐるのだ。自分自身の經驗に徴して、私は、文章をつくる事それ自らが一つの慰めであり、喜びである事を知つて居る。そのよろこび、此の慰めをすら、抑へ、奪はねばならぬであらうか？

私一身の事について云へば、私の淋しい、不幸な、落莫たる少年の日に於て、投書といふ事が、唯一つの慰みでありよろこびであつた。一日に一度きり來ない郵便配達のを、門に待ち受けて、胸を躍らしながら雑誌の封を切る時、新しい爽かな紙の匂に咽びながらをのゝく指先で頁を繰る時、而して、その頁の中から自分の名を見出した時！

私は云ふが、私はその時ほどの大きな喜びを、私の過去に於て經驗したことはない。これからさきには勿論無いであらう。私は、その意味から、投書といふ事に向つて感謝する。

併し、さういふよろこびが、お前を過まつて、今のやうなお前にしたのではないか、而して投書によつて誤まらるゝ者が、お前の外にもいかに多いかを考へないのか？——かういふ者があるかも知れない。それに對して私は次の如く答へる。そんな事は無い！ 投書によつて過られるといふやうな事は無い！ すべては必然である。いかに、投書に熱中した人でも、覺める筈の人は、屹度覺めた。私は、前に、「過つて、こんな身の上になつた」といつたが、しかし決して「過つて」ではないとこゝに言ひ直す。矢張、私は、當然私の就く可き道に就いたのだ！ 人間の本質といふものは、世の教育家達などが説くよりも、も少し力強いものである。と信

する私は、憚る事無くかう答へようと思ふのである——。

三三

か け す

K君が『墓』といふ小説を書いた。その中に、平素は庭の隅などに陰氣に蹲つてゐる墓が、強い風雨の夜に、兩脚を立て、庭中を勢よく踊り廻つてゐたといふ事が書いてあつた。「墓の踊り」は、滑稽だが同時に一寸凄味がある。

その時、種々動物の話が出た。蛇の話や、とかげの話や、それから種々の小鳥の話や。……その小鳥の話が出た時に僕が話したのだが、僕の郷里の方では、多く麥を作つてゐる。早春二月の頃、麥の芽が三四寸の長さに伸びると、麥踏といふ事をする。霜柱で根が浮きあがるのをおさへる爲め、又、若い葉や莖の抵抗力を刺戟する爲めに、芽生の上を一株毎に踏んで行くのである。その麥踏みの時などに、土の中から小さな粟の實や椎の實が、ころ／＼と足の爪先に轉げ出す事がある。山裾の林の蔭の畑でももあるならば不思議は無いが、廣い野原の真中へ、そん

な粟の實などが何處から飛んで來たか？ それに就いて年老つた百姓達が教へた。それは、かけすが嘴にのせて運んで來たのだ。かけすといふのは雀より少し大きい、鳩より少し小さい位の鳥なのだが、彼は空にある雲をめじるしに、くはへて來た木の實をその下に大事に埋めておく。が、雲は常に居どころを變へるので、埋めておいた場所がわからなくなつて了ふのだ。かけすは利口な鳥なんだが、鳥は鳥だけの智慧しかないのだ。

私は面白い話だと思つた。——近頃では、人間の考へもこのかけすのやり方と些とも變らな

不 幸

用達に出た途中で、驟雨に逢つて、びしょ／＼に濡れて歩きながら考へた。雨に濡れる事は些とも苦痛では無い。氣の毒にあの人はあんなに濡れて歩いてゐると、往來の人達に思はれるのが苦痛なのだ。

不幸といふものは、不幸それ自體にあるのではなく、他から不幸と思はれる事その事が不幸なのだ。同じやうな事が、幸福についても云へる。喜びにも悲しみにも云へる。人間の生活の大部分は、かうして他人の氣持によつて支配されるのだ。

他人の氣持がうるさいからと云つて山へ隠れたところで、山へ隠れるといふ心は、矢張他人の氣持に支配される心ではないか。本當に自分自身を生きることはむづかしい。それが出来れば所謂達人であらう。達人になれば山に隠れる必要がなくなる。大隱は市にかくれ、小隱は山にかくれるとかいふ言葉の意味は、恐らくそんなところにあるのだらうと思ふ。

### 靴墨の匂ひ

モオパッサンの鼻、ツルゲエネフの耳といふ事を聞いたことがある。デヤスミンの芳香のことしもなく漂ふ南歐の春の夜は、モオパッサンによつて描かれ、秋を迎へた樺の林の、幽かな木の葉の囁きは、ツルゲエネフによつて描かれてゐる。彼は、嗅覺の作家であり、これは聽

覺の作家である——といふのである。

僕も、モオパッサンよりツルゲエネフの方が好きである。従つて、モオパッサンの鼻よりも、ツルゲエネフの耳が欲しいのである。併し、事實、僕はあまり耳がよくないらしい。「音痴」といふ言葉があるさうだが、一體に音樂などはどうもよく判らない。その代り、嗅覺は人並以上に鋭敏らしい。

而して、僕は、嗅覺からの聯想が一ばん活潑である。ある匂ひを嗅ぐと、その匂ひが、漠とした感じを呼び起す。その感じをつきつめて見ると、やがてはつきりと一つの情景が——もう疾くに忘れてゐた筈の一つの情景が思ひがけ無くもひよつこりと記憶の底から浮び上る。その時同じ匂ひを嗅いだ事のある、その嗅覺の聯想からさうした記憶が喚び起されるのである。

此間のことである。私は、上り口の縁に腰をおろして二三日前から初めて穿き出した靴に、靴墨を塗つてゐた。その、そんなに不愉快ではない刺戟性の匂ひを嗅ぎながら、刷毛を動かしてゐるうち、私は、ふと豆腐屋の呼び聲を思ひ浮べた。

はてな——と思つてゐるうちに、黄色い枯芝に夕日のあたつてゐる廣い空地が思ひ浮べられ

たつどいて、でっぷりと肥つた色の白い、眼のいかつい四十許りの男の顔が思ひ浮べられた。二十七八の色の黒い、貧相なお上さんがその次に思ひ浮べられた。それから、玄關脇の三疊の小部屋、その小部屋の隅に据ゑられた小さな机。机の上に置かれた『漂流奇譚十五少年』の赤い表紙——そんなものが、次々と、はつきりと思ひ浮べられた。

もう二十年も前の事だ。十六の私は、Y市のHといふ人の家に寄食してゐた。夕方になると、主人の靴を磨くのが役目で、格子戸越しに見える、家の前の廣い空地をぼんやりと眺めながら、折からの豆腐屋の聲に郷愁をそゝられながら、私は、懶い手先に刷毛を搦んでゐたものだつた。惨めな少年時代の記憶を思ひ出すのが厭なので、私は、それきり靴磨きは止めることにした。

### 鋤禾日當午

去年の暮、小作人同盟といふ結社の某氏が見えて、展覽會をするのだから、何か書けと云つて、色紙と短冊とを置いて行つた。それを賣つて、賣上げを運動費に宛てようといふ計畫ださ

うで、諸家の揮毫されたものを見せて呉れたが、少なくとも僕自身の惡筆などは、徒らに、色紙と短冊とを浪費するに了るに違ひないと思はれた。が、拒むほどの事でもないので書くことにした。そこで文句をいろ／＼と考へてゐるうちに、昔、郷里の家の穀倉の扉に書かれてゐた古い詩を思ひ出したので、それを書いた。

鋤禾日當午

汗滴禾下土

誰知盤中餐

粒々皆辛苦

といふのである。それを穀倉の扉に書いたのは祖父である。祖父は生粹の農夫であつたが、好學の人で、書が得意であつた。八九歳の頃から、私は、此の祖父から支那の詩文を讀誦せしめられた。『古文眞寶』といふのが教科書であつた。とろ／＼と燃える爐の火の明りに、大型の和本の紙魚臭い頁をひろげては、折り取つた櫛の小枝で一字々々を指し示しながら、祖父が私の爲めに讀み且つ講じて呉れたいろ／＼の詩文のなかには、未だこんなのがあつた。——うろ覚え

だから、文字が違つてゐるかも知れないが、訓みは慥かに斯うであつた。「今日城廓に到り、歸り來つて涙衿に滿つ、遍身綺羅の者は、是れ蠶を養ふ人にあらず。」

又、こんな文句のあつた事も記憶してゐる。「二月に新米をうり、五月に新穀をうる。」

今、そんな文句を思ひ出して、私は農民の酸苦の時の古今と處の東西とを通じて滄りない事を思ふのである。

祖父は、模範的の農人だつた。野の勇者とも云ふ可き人であつた。彼は、村の者から「一聯隊」と呼ばれたほど大勢の下男共を率ゐて、朝から晩まで野に闘うて、疲れる事を知らなかつた。彼の用ゐた鋏は、村中で一番大きな鋏だつた。——私は、まづい文字を色紙に書きながらふと、太い短い無格好な自分の指に眼を止めた。これは、祖父が私に遺し傳へて呉れたものである。これは筆を執る指でない、鋏を握る可き指である。六十餘歳でその粒々辛苦の生涯を了つた祖父が、その村はづれの茅蜩の鳴く丘の上の墓地に埋められてからもう彼は二十年近くなると、私を愛し、私の將來に望みを囑して呉れた祖父が、今の私を見たら何と謂ふであらう？ 志を藝術に立て乍ら、風塵十年、未だ文場の中央を踏み得ない私の現在——それもいゝが、徒

らに糊口の爲めに筆を役し心にもない綺語を列ねて媚を都門の士女に賣りつゝあるやうな私の現在を見たならば——。

私は、いつかきつと、一篇の農民小説を書いて、祖父の靈に捧げたいと思つてゐる。

## 夢 の 話

所謂不見轉のしがなない稼業をしてゐる女が、こんな話をしたことがある——と、知人のSが私に話して呉れた話である。

その女は、ひどくセンチメンタルな女なのだ。さういふ境遇に落ちながら、さういふ境遇になじみ切れない、人生に於ける最初の夢とあこがれとを、未だ<sup>す</sup>耗り消されないまゝに有つてゐる、一種のロオマンチックな情緒を藏してゐる女なのだ。つまり君の好きさうな型の女なのだ。よ——と、Sはこゝでかう云ひ添へてから、次のやうに私に話して呉れたのである。

その女は——むろん、さういふ風な女だから、自分自分を浪漫化して、そこに醸される悲哀



を享樂しようとするやうな傾向も多分にもつてゐた。だから、云ふことを一々本當にするわけには行、なかつたが、兎に角、相當の家に生れて、何不自由なく育つて、女學校へも四年とか三年とかまで通つたといふのであつた。十六の時に死に別れたが、畫家を志してゐた一人の兄があつた、その兄がどんなに自分を可愛がつて呉れ、而して自分も亦どんなに兄に親しんでゐたか？——それを話し出す時彼女はいつも涙含んでゐた。「私は、その時分本當におてんばでしたわ。お兄さまの行くところへは、何處へでも跟いて行つたの。一寸散歩に出るツたつて、お兄様を一人ではやらなかつたの。狗兒いぬこのやうに、あとになつたりさきになつたりしてお兄様に跟いて行くツて風でしたの。だから、お兄様が、二十二の時に、肺病で死んで了つた時は、一緒に死んで了つた方がいゝと思ひましたわ。」——そんな風に彼女は語るのである。

「私、世の中の男の人はみんなきらひ！ 何人たれも何人もみんなきらひ！ 唯、死んだお兄様だけが好きな。お兄様の夢を今でもよく見るのよ。でも、その夢がいやないやな夢なの。どうしてそんな夢を見るんだらうと思ふとなさけなくつてしかたがないの。あゝ、いやね、こんな稼業なんて——。」と、彼女は、眉をひそめて、心から溜息を吐くのである。

「どんな夢なんだい？」ときくと、

「お座敷がかゝつて、今夜のお客さんは、何でも大へんいゝお客さんなの。それでいそ／＼として出かけてゆくと、大きな家で、いくつもいくつもある座敷を一つ一つ通り抜けて行かなきゃならないの。その、一番奥の小さな座敷にお客さんが待つてゐるのよ。何人だか判らない、何でも大へん好いお客さんだつて事だけが判つてゐるの。で、わく／＼しながらその座敷の襖を開くとそこにきちんちんと坐つてゐて、じつと私を見てゐる人——それが、そのお客様があのお兄様なんぢやありませんか。私眞赤になつて、あツと云ひながら顔を抑へるの。するとその拍子にいつも眼が覺めて了ふの——。」

## 悪 夢

伯爵夫人となる可き身でありながら、自動車自動車の運轉手と戀し合つて、情死をしそこなつて、もう一人の自動車自動車の運轉手ともう一度戀し合つて、而して、日蔭の佗住居に世を住みわびてゐ

た芳川鎌子もとう／＼死んだと云ふ。

鎌子の生涯は、一般道德の見地から見れば唾棄すべきものであつたかも知れぬ。が、之を人間性の必然から見れば、その行爲は一々肯定する事が出来る。彼女はノラであつた。一層悪き境遇に置かれて、しかも、はつきりと己をつかむ丈けの智見を有たなかつたノラであつた。出来そこなひのノラ、盲目のノラ、之を要するに日本のノラであつた。

彼女の生涯は、實に一場の悪夢であつた。悪い夢は早く覺めるがいゝのだ。今にして、彼女に對する社會の無理解と無情とを語るのは、餘りに月並な感傷主義かも知れない。予は、涙を揮つて這個悖德無慚の一淫婦の死を祝福しようと思ふ。

悪夢に似た短い生涯のもう一つとして、あの、二三年前に世を騒がした娘強盜の事が思ひ出される。いゝ着物が着たさ、といふ爲めばかりでは無い、一人の母に樂をさせ度かつたのである、それには金が欲しい、そこで強盜になつて子供一人が留守してゐる或る家を襲うたのである。この強盜をしたといふのは、いかにも大膽不敵な所業には違ひないが、しかし、彼女は、活動寫眞の毒婦傳で之を學んだのである。即ち、これは謂はゞ、彼女の模倣的本能、或は藝術

的本能の現れなのである。罪惡の華想化——空想的な彼女のお芝居氣が、少しばかりの實際的慾望と結びついて、彼女を、世にも怖ろしい娘強盜としたのである。而して、彼女は牢屋へ入れられた。牢屋へ入れられて、世の中の噂を耳にするに至つて、彼女は、初めて自分のした事の意味を知つたのである。而して、遂に牢屋の格子戸に獄衣の紐を掛けて、自ら縊れて死んだのである。死ぬ時に、彼女は、覺束ない言葉で一首の辭世を遺して、その最後を型通りの罪人らしく装ふ事を忘れなかつたのである。彼女の可憐なお芝居氣は、死の際までも續いたのである。予は、彼女の辭世を讀んで、この小さい夢想家の生涯に心を撃たれずに居られなかつた。だが、これ等の生涯ばかりではない。要するに、人生は皆一つの悪い夢だ。覺める期のない悪夢なのだ。さう思はずには居られない。

## 偶然の死

去年の春、T——からの歸り途での事である。T——から二つ目か三つ目の小さい停車場に汽車が停まつた時、私達の車室に、一人の新しい客が這入つて來た。五十許りの、色の黒い小柄な爺さんで、股引に草鞋穿の、見すばらしいみなりをしてゐた。多分近在の百姓で、一寸用足しに出かけたものらしかつたが、その眼やになどのついた、小さい眼を、しよぼしよぼと瞬きながら、おどくくと落着き無く四邊を見廻してゐる様子が、明かに汽車などに乗りつけない事を示してゐた。

「もしく、こゝは違やしませんか。今に檢札係が來るといけませんから——。」こんな風に注意してやるのが、此の場合親切であるかも知れないが、そんな事は、氣恥しくて云へたものではない。若し、あの横柄な車掌がやつて來て、何も知らない爺さんを困らせるといけない。さう思つてはらはらしながらも、私は黙つて見てゐた。車室には七八人しかゐなかつた。隣の三等室の盛りこぼれるやうな混雜に較べて、自分の乗り込んだ此方の室の様子は、爺さんの眼にも合點が行かないらしく、爺さんは、おどくくと不安さうに見廻す事を止めなかつた。それを見てゐると、どうも氣になつた。教へない自分に責任があるやうな氣もするし、といつて、云

ふ事も出來ないし——私は、妙に苦しい氣持がして來た。

それから三つか四つ目のM——といふ停車場に着いて、そこで二三分停車して、やがて發車した時である。汽車が停車場の構内を出はづれて、漸く速度を加へて來た時である。ぼんやりとしてゐた爺さんは、ふいと立上つて、きよとく窓の外に眼をやりながら誰にもなく、

「M——てなあこゝですかえ？」と聲をかけた。

「あ、M——はこゝです。もう出て了つた。」と私が云つた。私の傍の商人風の男も、聲を合せて同じ事を云つた。と、爺さんは、しまつた！といふ風に、とつかはと座を離れて、出口の方へ走り出した。

「駄目ですよ。もう！」と、私が云つた。私の外の二三人も、「駄目だ。」「駄目だ。」と叫んだ。が、爺さんは、それをば耳にもかけずにいきなり、扉を引きあけた。

「あぶない、あぶない！」と、私は叫んだが、まさかと思つたので、起上つて引き戻す氣もしなかつた。が、次の刹那には、爺さんは、もうその踏臺から飛び下りてゐた。

「あ！」と車室一同皆總立になつた。私は眞先に窓から首を出した。私の眼は、もう十數間彼

方の線路の傍に、ころりと横になつたまゝ動かずにゐる爺さんの姿をちらと認め得た丈けであつた。

「馬鹿な奴だ！」と、腹立たしげに叫ぶ者もあつた。「かあいさうに——」と嘲るやうに云ふ者もあつた。「呆氣ないもんだ、ふゝ！ たしかに死にましたね。」と、冷やかに呟くものもあつた。今迄、頑かたくなに押黙つてゐた車室の中の七八人は、皆此の事件からの昂奮で、一つの心持に融け合ふやうに見えた。汽車についての種々の事故が、各自の口からそれからそれへと語られた。

「だが、あの爺さんは、助からなかつたでせうか？」と、私が云ふと、私の向側の土木技師といつた風體の洋服の男は、

「助かるもんですか！ 何しろ汽車が此方に行く、先生は向うへ向いて飛んだんですからね。」と、得意さうに云つた。

「まあ、九分通り六ヶしいね。」と、もう一人がいつた。どうしても死んだ事にしなければ面白くない——といふやうな氣持が、人々の顔色に讀まれた。

本當にあの爺さんは死んだのだらうか？——何といふ呆氣無い事だ！

私は、今でもともするとあの時の事を思ひ出す。私の見た最も鮮かな死の姿——而して又最も鮮かな運命の姿として、死とか運命とか、そんな事を考へる毎に、私は屹度、あの汽車から飛降りた爺さんを思ひ出す。

## 春

神嘗祭の頃になると、山茶花の花が咲く。山茶花の花が咲く頃になると、家の庭から眺めやられる國境の連山の頂が斑に雪を置きはじめる。

「おお、寒い！ 寒い筈だ。今朝は山に雪が来たぞ。」

さう云つて遠山の雪に瞳をあげる心持、あのきいと心がひきしまるやうな新鮮な心持は、山國に育つた人ならば、何人でも経験するところであらう。

その山の雪が朝毎に白い部分を増していつてやがて眞白になる頃には、「富士隠し」と私達が呼び慣らはしてゐた一際高い峯の肩のところにある富士山がひよつこりと額をのぞかせる。多

分光線の工合なのだらうと思ふが、其頃私達は、富士山に雪がつもつて、それだけ富士山の背丈が高くなつたのだとばかり思つてゐた。梯形になつてゐた頂部の一角だけがほんのちらりと見えるだけなので、勿論八朶の花にたとへられるあの全容を髣髴す可くは無かつたが、それにしろ、

「己がの村からは富士山が見えるぞ。」と、隣村から来る學校友だちには、それを自分のものやうに自慢したものだつた。

が、その富士山も、寒い盛りの三十日か四十日の間、ちらりと額を見せただけで引込んで了ふ。せいびして、ちらと覗いて見た——まあ、さう云つた感じなのだ。富士山が見えなくなる頃には、山々の雪も消え初めて、匂やかな紫紺の山肌が、光を含んだ藍色の空にほのめく。どうかすると、その山々の輪廓が、一抹の夕雲に溶け込んで了ふ。すると、その夜から降り出した柔かな雨が二日も三日も降りつづく。それがあがると、もう春なのだ。北相模の高原の山裾の村には、かうして春がおとづれるのだ。

春が深くなると共に麥が伸びる。桑が芽を吹く。麥畑、桑畑の間を帯のやうに伸びた野道を十二三町、二つ三つの部落と一つの驛とを通りぬけて、その驛の盡頭はつれの高臺にある小學校へ、私は尋常を四年、高等を四年、前後八年通つたのである。

私は、へんくつな子供だったので、往きにも復りにも友達の群を離れて一人の時が多かつた。私は一人淋しくその野道があるきながら、麥笛をこしらへては吹き鳴らした。麥笛、田舎育ちの人達は皆知つてゐよう。あの柔かな麥の莖を二三寸の長さに切つてこしらへた小さな笛、唾をつけて吹くと單調な音を出す小さな笛。私は好んでそれを吹いた。それを吹き吹き、長い野道の盡きるのを忘れて歩いた。私は今でもあの麥の莖の甘酸っぱい舌觸りをありありと喚び起すことが出来る。その頃の私は、悲しみをもよほすこびをも、淋しさをも、あこがれをも、あの單調な麥笛のしらべの中に、自由に歌ひ出すことが出来たのだつたが――。

麥笛で思ひ出したが、まだ、笛にする事が出来るまでに麥が大きくならないで、黒い土に飛か白の模様を置いてゐる頃、だから勿論冬のうちのことが、私達はよく麥踏みといふ事をさせられたものだ。霜柱で根が抜けあがるのを防ぐため、また、より強く伸びる力を刺戟する爲めに、二三寸位に生えあがつた麥の芽をわざと踏みつけてやるのだが、その麥踏みの時、土の中から粟の實だの檜の實だのが、ころ／＼と足もとに轉び出る事があつた。こんなところはどうして？ と、不思議に思つて訊いて見ると、祖父は次のやうなことを話して呉れた。それは、かけすが山から脚へて来てそこへ埋めておいたのだ。かけすはそれを埋める時、空にある雲を心覚えにして、その雲の下に埋めるのだが、その心覚えの雲は、すぐに動き去つたり消え失せたりする。かあいさうにかけすの奴、折角埋めておきながら、見附ける事が出来ないのだ――。私は子供ごころに心からかけすを憐んだことがあつた。それは唯、かけすばかりの悲しみでは無いといふことを、二十年後の私はよく知つてゐる。

かけすといふ小鳥を諸君は知つてゐるであらうか？ 小鳥と云へば、私の生れた村のあたりには、實に小鳥が澤山ゐた。高等科の二年頃だつたと思ふが、私の仲間に、目白を捕つてそれを飼ふことが、一つの流行になつて、おれは三羽もつてゐる。おれは五羽もつてゐるなどと自

慢しあつたことがあつた。——だが、何といふへまな少年だつたらう。私はどんなにもち竿を振廻して見ても、一羽も捕る事が出来なかつた。友達に一羽貰つたやつさへ、餌をやる時に逃がして了つた。

三

數へ年の十五の春に、私は小學校を卒業した。十五の春。私は、その時初めて春の哀しみを知つた。——それでなくてさへ没落の運命にあつた私の家は、その前の年の暮に火事を出して何も彼もすつかり焼けて了つた。唯一つ焼け残つた裏庭の土藏の廂の日溜りに蹲つて、「東京苦學案内」といふ本を讀んでゐると、そこへ父がやつて來た。父は私の手からその本をとりあげて一寸表紙を見て、黙つて私の手に戻したが、その時の父の微笑は淋しかつた。

卒業式が濟んだあくる日に、卒業記念として、學校附屬の樹栽地に、苗の植附に行つたことも、忘れがたい思ひ出である。三十人ばかりの卒業生は、先生たちや村役場の吏員達に率ゐられ、幾千本の杉苗を車につけて、その山深い樹栽地へと出かけて行つたのであつた。山と山と

の間の、溪流に添うた谷間の小路を一里近くもはひつたところ、そこに山裾の斜面を切開いて私たちはその杉苗を植ゑ附けたのだつた。私と、私と一番仲の好かつたK——と、Tとの三人は互に祝福し合ひながら、殊に念入れに一本宛の苗を植ゑて置いた。

「どんな事があつても、此の三本は枯れる事は無いよ。」

「一番大きく、一番高く——どうかしつかり育つて呉れ！」

「十年たつたら三人で見に來ようよ。」

三人は、こんな事を話し合つた。而して、手拭の端を切つて、そつとその根元に巻いておいた。KもTも、Y市の中學へ行く事になつてゐたが、私だけはどうするともきまつてはゐなかつた。並べて植ゑた三本の杉の木——その中でも、私の分だけは、無事に育ちさうも無い氣がした。

漸く苗を植ゑ了へた私達は、もう日が暮れて、暮靄があたりを立てこめる頃になつてから山を降りて部落の方へ出て來た。仲の好かつた同志が三々伍々と打連れて、いろいろと話しながら、その溪流に添うた山間の道のあるいた。うすぐらく靄のこめた路傍の林で、時々、小鳥の

鳴く聲がした。

「さやうなら。」

「さやうなら。」

部落の方へ出ると、その八年の間一緒に學んだ友人たちは、五六人宛、二三人宛、群を離れてそれぞれの家路へと別れて行つた。その「さやうなら」がつまり私達のお互ひのフエア・ウエルであると共に、又、私達自身の少年時代への別れの言葉では無かつたか？

「さやうなら！」

あの友達の大部分とは、その時、ろくろく顔も見合はさないで、唯、その簡単な一語を交して別れたまま、それきり一度も逢はないのである。——あの時、別れて行つた友達の後姿、それは「少年時代」そのものの後姿だつた。私は今でもなつかしくそれを思ひ浮べる。その春の夕の靄の中に永久に消えて行つて了つたうしろすがたを——。

#### 四

それから十六の春、十七の春、十八の春——。私の春の思ひ出は皆惱ましいものばかりだ。「春」といへば、楽しさ、快さ、明るさを思はせるが、私の春はその反対だつた。

十六の春、私は横濱に居た。私はそこで小學校の准教員といふものになつてゐた。私の寄宿してゐた家は、その港市の高臺にあつた。私は夕方になると、近所の坂の上の空地に出て、煤烟に曇る海港の空の、赤い夕日を眺めてゐた。私は、あの父と母とがゐる故郷の村に、堪へがたいまでの郷愁を感じながら、一方では思ひ切つてアメリカへ渡らうかなどと考へてゐた。弱い情緒と、燃えるやうな野望との交錯がそこにあつた。

#### 五

十七の春は郷里の家で迎へた。私は横濱から、再び父の家に歸つてゐた。私の家は益々貧しくなつた。私は家の爲めに働かなければならなかつたのである。——其の十七の春も晩れる頃私は相模川の筏に乗つて、鎌倉の師範學校に、正教員の檢定試験を受けに行つた。筏で平塚まで下つて、そこから鎌倉に行くのが汽車で行くより便利だつたのである。近くの町から同じ試



験を受けに行くN君と一緒だった。N君は、私より二つばかり年上で、色の青い、顎のところが濃い眉の下に大きな眼を始終おどおどと慄はしてゐるやうな、見るからに神経質な、併し非常に心の細かな、物の云ひ方など女のやうに優しい青年だった。N君は、去年受けて見たが失敗したといふので、大へん試験を苦にしてゐた。「なか／＼六かしいですよ。百人もある受験者の中で、受かる人は十人と無いんですからね。」などと囁くやうに話してきかせた。筏の上でも歯が痛いと言ひ云ひ、ポケットから小さな本を出して私には隠すやうにしてしきりに読んでゐた。相模川の水は悠々と流れてゐた。下るにつれて、兩岸には平野が遠く開け、麥の緑、菜の花の黄、うつらうつらと輝く春の日の中には、雲雀の聲がしきりにした。

試験なんか受けてどうなるものか？ おれは小學校の先生が目的ぢやない。私は筏の上に坐つて、その雲雀の聲を聞きながらそんな事を考へてゐた。而して、試験のことばかり苦にしてゐるN君の小心さに、軽い侮りを覺えずにはゐられなかつた。が、N君は、年老つた兩親や妹を、僅かばかりの俸給で養つて行かなければならない人だったから、早く正教員になつて、すこしでも多くの俸給を貰はなければならぬ必要に迫られてゐたのである。

その年の試験は、N君も私も失敗した。その翌年も私は鎌倉に出かけたが、その時は私は一人だった。N君は肺を病んで死んで了つたのである。——私は、筏の上から、兩岸の景色を眺めながら、N君のことを思ひ出してひそかに涙を流した。

## 六

十八の春、十九の春——。

東京へ出度い出度いと思ひながら、私は、相變らず小學校教師としての單調な生活を繰返してゐた。私は、自分の家から凡そ二里ばかりもあるTといふ村の小學校に、その頃、二年近くも通ひ續けた。雨が降ると泥濘が深く、日が照ると埃が立つて、始末におへない悪路だった。一里近くの間は、まるきり人里はなれて、うね／＼と帯のやうに續くその一本道は、時々、馬力車や行商人などに出會ふ外、あまり人通りもなかつた。私は、その淋しい道を、いろいろの夢を見ながら朝に晩にこつ／＼と歩み續け、辿りつづけたのである。

その道の真中ほどのところに、一本の柿の樹があつた。私は、いつも、その柿の木の根に腰

をおろして一休みした。子供の時分からの私のへんくつな性癖は、年と共に加はつて、私は知つた人に逢つてもろくく挨拶さへも出来ないやうな人間になつてゐたので、語り合ふ友だちなどは一人も無かつた。さういふ私にはその柿の木が、何よりもなつかしい友だちであつた。私は、その木に向つて、「おい、君！」と話しかけ度いやうな気がした。そしてその柿の木の下に、頭が半分ばかりかけた一基の石地藏があつた。私は、時々、その前にじつと頭を垂れてゐるやうな自分を見出した。その頃、私は次のやうな言葉を日記に書いた。(噫、風を怨まず、雨に傷まず、いつも微笑して私を迎へたまふ地藏尊よ、おん身の前に一人の失意の青年が立つ。彼は、おん身の爲に忍ぶ事を教へられて、僅かに堪へがたき悶えを抑へ、冷たい涙の底に、さびしい笑を馴らされて、惨憺たる運命のもとに服従しつゝあり——)

淋しい野中の一本道、鳥もなかず、路傍に一莖の草花さへ見出されないやうなこの淋しい道こそ、今思へば、私の青春のシンボルではなかつたか？

## 七

二十三の秋に、長い間の望みがかなつて、私は漸く東京へ出ることが出来た。二十四の春は東京で迎へた。東京へ出て來はしたが、私は些とも幸福ではなかつた。現實の苦みが、生活の悩みが、春のよろこびをよろこぶ可くは、あまりに重過ぎ深過ぎたのである。私は、牛込見附の橋際にゐんで、あの藤村が、「春」の中で云つてゐる言葉を——「努力の苦痛、浪費の悲哀、柳は新造と云ひ度いが、既に年増であつた。」といふ言葉を、しみじみと繰返した。

さて、それからまた十幾年。私の春はもう遠く去つた。私は、今更その月並な歎きを繰返すことはしまい。ただ、私は、一言云ひ添へ度い。それがどんなに惱ましい、苦みの多いものであつたにせよ、讚むべきは春である、愛むべきは春であると。

若い諸君、諸君の春に祝福あれ！

(十二年四月)

## 私の好きな作家

私の好きな作家が三人ある。ハアデエと、シングと、チリコフだ。好きな作家と云つたところで、その作家のものを皆讀んだわけでは無い。シングだけは皆讀んだが、あとの二人は、ほんの一部分しか讀んでゐない。

ハアデエは、ツルゲエネフに似てゐると云はれるが、ツルゲエネフよりずっと土臭い、而して野暮臭い。ツルゲエネフはなか／＼ハイカラらしいし、また事實ハイカラであつたのだらうが、ハアデエには何處かぢぢむさいところ、田舎者らしい處がある。そこが自分に共鳴するのである。

ハアデエの作で、平田禿木氏の譯に係るあの「つかね髪」「妻ゆゑに」などは、自分の愛讀措く能はざるもので、「つかね髪」の中で、ソフイといふ不仕合せな寡婦が、眠れない夜の明方に、窓の下を通る青物車の行列を見ながら、故郷の生活を追懐したりする情景は堪らなくいゝ。その運命論者である點で、ハアデエもツルゲエネフに同じだが、ハアデエの方が本當に運命の底を見てゐるやうに思はれる。ツルゲエネフには、どこかに薄ッぺらなところがあるが、ハアデエは何處までも篤實で、而して嚴肅だ。それ丈けに底力がある。

こんな風に云ふと、ツルゲエネフをひどく貶すやうだが、ツルゲエネフも大好きな作家である。ツルゲエネフの作を思ふと、初戀の女を思ふやうな氣がする。「處女地」「その前夜」「煙」「父と子」「貴族の家」「ルウディン」「アアシャ」——どれも皆懐しく思ひ出される。あの二葉亭の名譯「はつ戀」を讀んだのは十八か十九の時だつたが、その時分私は、S川の渡しを渡つて、S山の麓を廻つて、Nといふ高原の村の小さな學校に小學教師として通つてゐた。山茶花の花

の咲いた教室の窓で読み、小鳥の囀る林の蔭で読み、夕の波のさむくくと舷を打つ渡し船の上で讀んだ。二度目の半分ばかりを讀み進めた時、私は、つい、その本を河の中に取り落して了つた。——そんな事も、今はなつかしい思ひ出の一つである。

ツルゲエネフの女性の中では、私は「煙」の中のイリナが好きだ。大貴族の血に呪はれて、處榮の巷に誘ひ込まれて、本當の戀に生きる事が出来なかつたイリナの悲劇は、藝術的に見ても、ツルゲエネフとしてはかなり深刻なものだと思ふ。

ツルゲエネフの小説は、どれもく、その幕切れがいゝ、物語の結び方に非常に餘情がある。その作中の人物の、物語が了つてからあとの消息を、大觀的に一筆づゝ書いて、某は今某と結婚して幸福な家庭を作つてゐる、某は行方が分らないが、某州のある處でその落魄姿を見たといふ者がある、などと書き續けられてゐるのを見ると、いかにも人生悠々の感があつて、云ふに云はれぬ感慨を唆られる。「春の波」といふのは、つい近くに、生田春月君の譯で讀んだが、

あれなども、その結末で、サアニンが、そこで初戀の人を見たフランクファルトの町へ、運命の悪戯に弄ばれ盡した敗殘の身を幾十年振かで運んで来て、昔を偲ぶ一章があるが、あゝいふところは堪らなくいゝ。ツルゲエネフの常套手段であり、一般的に見ても、かなり有ふれた月並な手法だと思ひながらも、矢張あゝいふところに牽きつけられる。

シングも、運命主義者であり、郷土藝術家である點でハアデエと同じい。而して、この點に、私が彼等を愛好する所以が存するのであらう。シングでは、矢張、「海に騎り入る者」がいゝと思ふ。シングがそのモットオとしてゐた『舞臺の上では、眞實がなければならぬ。これと同じ時に欣喜が無ければならない。』といふ言葉は、これを一般藝術に移し用ゐてもいゝ。私は、藝術にはなぐさめがなければならぬと思ふ。勿論、こゝになぐさめといふのは、かなり廣い意味で云ふのだが——。

たとへば、私はアルツイバアセフの作品を好まないのは、そこに何のなぐさめもないからで

ある。「ランデの死」の一篇の如き、何といふ暗さ、何といふ闇黒さぞ！ あゝいふ風な読む者の心をいぢめつけ、傷めつけるばかりの藝術を私はとらない。ドストイェフスキイの作品の如き、随分暗い、闇黒な事件を取扱つてはゐるが、そこに或るなぐさめが潜んでゐる。トルストイの「アンナ・カレニナ」でさへ、アルツイバアセフほどには慘酷ではない。慘酷に読む者を苦しめはしない。読む者を苦しめるのはいゝが、苦しめながらも一面になぐさめを與へるやうなところがなければよき藝術とは云はれないと私は思ふ。

もう一人の私の好きな作家であるチリコフは、ハアデエヤシングほどの世界的な大作家ではないらしい。而して、私は、關口彌作氏の譯になるその短篇集を一冊讀んだに過ぎないが、此の作者はその一冊によつて非常に好きな作家となつた。

私の讀んだチリコフの短篇集は、その巻頭に「親愛なる母上よ——。私は過去の生涯の飛び去つた歡びと悲みとの此の物語を御身の記念に捧げる。」と記されてゐる通り、殆ど皆少年時代

の追憶を描いた抒情詩的小品である。従つて、その主人公は皆少年で、描かれたところの多くは少年の眼に映じ心に觸れた人生と自然とである。少年は皆ロマンチストである。少年の世界はさながらにして詩である。私は此の意味に於て、限りも無く少年の時を愛する。失はれたるロオマンズ、滅ぼされたる詩に對する愛惜を以て、私は少年の時を愛惜する。而して、私は、此の同じやうな心持の作家をチリコフに於て見出したのであつた。

その短篇集には、「連翹」「チャーガ」「モデル」「ルウシヤ」「馭者臺にて」「田舎町」「秋の夢」などと題するのが收められてゐるが、中で、「モデル」「馭者臺にて」などいづれも少年の戀を取扱つたものである。その心理描寫の靈活も及び難いと思ふが、私にとつて一番懐しいのは、あの靈魂の薄明りとでも云はるか、夢想ともなく現實ともない神祕的な奥深い氣分がたまらなく私の心を牽きつけるのである。

その中の、「運命」といふ短篇では、社會運動の爲めに放逐された大學生が、その放逐されて

遠く行く旅の間に一人の美しい女學生と相知り、不思議な運命に導かれて雪の曠野を鈴を鳴らしながら走るトロイカの中で、熱烈な戀を囁くシンを描いてゐる。『相次いで三つのトロイカは動き出します。雪は樺の滑り桁の下できしみます。そしてまたも鐘と小鈴との音樂。併し心臓の音樂は一層音高いのです。黒眼の女は何處から何處までいろ／＼のものを巻きつけ包まれてゐて容易に手を捜し出す事が出来ない程です……天鵝絨のやうな小さい暖い手です！ 私はその手を握り緊めます。そして女が握り返すのを感じます……あゝ、斯くして一生涯も乗つて行き度いやうです……』こんな風に書き續けられてゐるのを見ると、實際神往くの思ひがする。

この學生時代に社會運動に参加して放逐されたといふのは、チリコフの實際經驗らしい。チリコフは勿論單なる夢想家乃至抒情詩人ではなく、立派なマルキシストで、その方面の主張によつて裏附けられた作品も多いさうだが、私は未だ読んでゐない。

昇曙夢氏の紹介によると、チリコフは生粹の田舎者だといふ。その田舎者といふ點が私の大

に共鳴するところであるが、しかし、生粹の都會人たるシュニッツレルの作なども私は嫌ひではない。「ベルタ・ガルラン」などは、随分立派な作だと思ふ。私の最近に讀んだものの中で最も感心したものゝ一つである。あの女主人公のベルタ・ガルランがいかにも日本的な、我々の周圍にいくらもゐさうな女なのが殊に興味を牽いた。淡々とした筆付で、何處へ何う力瘤を入れるでもなしに、あれ丈の複雑な心理を、あれ丈精刻に描破した手腕は實際たいしたものだと思ふ。

總じて、外國の小説を讀んで感じる事は、その質が緻密で、さうして組立ががつしりとしてゐる事である。建築でいふならば、石造の大建物だ。日本の小説は、それに較べるとバラック見たいなものだ。いかにもお手輕で、薄つぺらで、お粗末である。これを油繪と、水墨の一筆書きとの相違と見る時、禪とか茶とか俳句とかに共通した東洋風日本風の簡素な風格として亦一面の長を認めねばならないかも知れないが、作家の生活に餘裕がなく、一夜造りの粗製品をこしらへて、忙しいジャナリズムに追隨する事に職由すると見る時、大に悲觀し度くなるのである。どつしりとおちついて、全幅の精神を傾倒して、命懸けの一大作品を出すといふやうな人が續々出て來ないと、日本の文壇は救はれない。

(十年三月)

## 祭りの頃 (大正八年)

九月十三日。今日も雨。朝、C——學會の仕事。出社。

「文章俱樂部」の校正その他。

夜、N、M二君と川鐵に晚餐を喰ひに行く、N君は、明朝、愈々鶴沼の方へひっこす事になつて居る。いろいろの事で、感慨が多い夜である。自分は何時になく澤山飲んだ、而してかなり酔つた。N君は、例の激越な調子で、例の藝術と人生といふやうな問題について語つた。彼方へ行つたら愈々年來計畫の大作にとりかかるのであらう。早く書いて呉れ、ばい、と思ふ。同時に、何だか目のまへに大きな黒いものもく／＼ともちあがつて来るやうな氣がして少なからず壓迫を感じる。自分もしつかりやらなければならぬと思ふ。NとMと自分と——この三

人が、かうしていつも離れられない仲間となつてからもうかれこれ十年もたつ。鼎座して飲み且つ談じてゐる氣持は十年前と一寸もかはらない。あの時分、N君は、

『君、今夜は沈痛に酔はう!』

といふのが口癖であつた。自分は、此の頃になつてその「沈痛に酔ふ」といふ氣持がわかつて來たやうに思ふ。——今夜はたしかに、三人とも稍々沈痛に酔ひかけたやうである。十一時頃歸る。雨がざあ／＼と降つてゐた。M君は酔つた時の癖で、青ざめた顔をしてじつと眼を据ゑて、ふらり／＼と後の方から歩いて來る。M君のかういふ時の眼付には一寸鬼氣がある。

留守にK君が來られて置いて行つたといふK君の近著「青春行」が机の上のせられてあつた。美しい本である。

九月十四日。曇、時々雨。蒸暑い、たまらなく頭の重い日。出社。

頭の重いのは昨夜の酒のせみであらう。無理やりにすこし仕事。かういふ時の仕事は屹度、頭を悪くすると思ひ乍ら、かういふ時に限つて反抗的に何かするのが自分の癖である。

午後、K君とM君とが見える。社の應接室で二時間ほど談話。故郷のまつりの話、旅の話、

それから世の中が面白くないといふ話、盛に話をしたので、すこし頭がかりとした。それから、三人で田原屋に行く。M君はサイダア、K君は酒、自分もすこし飲む。飲みながらいろ／＼と語りつゞける。K君の話は、その小説のやうに非常に味があつて面白い。すこしく酔を帯びたK君は、

『加藤君、君も矢張もて無え作家だぞ！』と、叱咤するやうにいふ。自分は全くもてさうもないが、K君などは今では決してもてない作家とはいへ無からう。K君の隠忍十年間のいろ／＼の思出話は、きいてゐる中にもさまざまの事を考へさせる。M君は、その批評の様な温雅な微笑を以て、時々私達の話に相槌を打つ。話してゐるうちに、驟雨がやつて来た。小止みになつたので出て見たが、矢張、降つてゐる。M君は洋傘をもつてゐたが、自分とK君とは無い。K君は、「おれが借りて来る。」といつて、心當りがあるのか、雨の降るなかをふら／＼と歩いて行く。私は、丁度その前に傘屋があつたので、蛇の目を一本買った。しばらく待つてゐたが、K君はどこへ行つたのかなか／＼戻つて来ない。で、M君と二人で先に歸る。歸るとすぐ寝て了ふ。恒雄が寝る前に、

『今夜あらしは来ないね、お母さん。』と何度も念を押してゐたと妻が語る。一昨年秋の大あらしのときの恐ろしさが、子供心に強く印象されてゐると見える。ある時は、雨戸を皆吹き飛ばされて本當に弱つた。

寝てから風が出たやうだ。N君の一家は今朝鶉沼へ立つた筈だが、今夜は、波も高いであらう、あれで非常に淋しがりやのN君の事だから、さぞ心細い氣がするだらう——など、思ひながら寝る。

九月十五日。昨夜はかなり風が吹いたらしい。庭の隅の萩、薄、夾竹桃などが皆靡き伏してゐる。萩は、今よく咲いて居る。黄色い小さな蝶が一羽、地にしづんだ萩の間からひら／＼と舞ひ出した。今日は久振で明るく晴れたと思つたら、朝飯を食ふ頃からまた曇り出す。

今日は休み。昨夜、社の方から届いた「郷愁」の校正を四臺見る。「郷愁」は、今度出す短篇集の名だ。讀み返して見ると、いやといふほどまづさが眼につく。それにほつ／＼と手を入れて行く。ぬかるみのでこぼこの道を、足に合はない大きな靴で——而も爪先から泥水が滲み込むポロ靴で行き惱むといふ心持だ。たつた四臺見るのに午前中かゝる。ひどく疲れた。もう三〇



四頁まで出たから、あと十頁位で終るだらう。兎に角、一冊にまとめて世の中へ出す時が来たのだと思へば嬉しく無い事は無いが、父無くして生るゝ子の如き此書の運命を考へると、嬉しいとばかりは思へ無い。あまり悪口を云はれると、これでも、『なあに。』といふ氣はするのだが、積極的に、「敢て世にすゝめる」などいふ自信は毛頭無い。かう自ら信ずる事が出来ないのは困りものだと思ふ。すぐあとから、いや、それが當然なのだと思ふ。が、そんな事をとつおいつ思つて見たところで、何にもなるものではない。書く興味が續く限り、こつ／＼書いて行つて見よう。そのうち、もうすこし暇でも出来るやうになつたら、すこしは氣に入るものも出来るかも知れない。出来なければ仕方が無い。又、心持の向きやうで、何時筆を折るやうになるか判らないが、それも皆神様の思召だ——などと、校正を前に置いて考へた。又、こんな事も考へた。此の本が出たら、何人よりも一番多く喜んで呉れるのは、矢張父であらうが、「文章は經國の大業」を信条とする父の眼に、愚かな戀のいきさつなども書いてある此の小説がどううつるだらう？

父の若い時に友達に、安西某といふ人があつて、その人が、當時一世を風靡したといふ「雪中梅」などに倣つて書いた小説に、「雪窓佳話翠松影」といふのがあつた。私は十四五歳の時に、その小説の草稿——菊二倍位の大きな洋罫紙の一冊に、毛筆で眞四角な文字が片假名交りに綴られ、ところ／＼に朱が入つてゐた——を、土藏の棚の父の古文庫の中から発見して鐵網かたむすを張つた小さな窓の下、うす暗い光で貪り讀んだ事があるが、私の著作といふものに對する興味と憧憬とはその頃から動きはじめたらしい。——そんな事も思ひ出された。

追蒐けられはじめた〇——學會の仕事もしなければならぬと思ひながら、あまり疲れたので、午後から午睡する。二時半まで昏々として眠る。此頃はたしかに、すこし頭を悪くしてゐる。入浴。矢張仕事をする氣が無いのでI君を訪ねる。「郷愁」の批評を書いて貰ふ約束をする。夜、神樂坂を散歩。歸りはいつものやうに牛込館の横町から裏通りに出る。私は、この暗い、静かな裏通りが好きである。軒燈の灯が濡れた石がけなどにほのめいて、蟲がしきりに鳴いてゐる。寝る前に「中央公論」の、大泉黒石君の「私の自叙傳」を讀んだ。面白い。

九月十六日。曇、時々雨。頭が重く不快でたまらない。例によつて七時頃起きたが、何をする元氣もなく、籐椅子の上で九時の出勤時間までうつら／＼としてゐる。

恒雄、今日からおとなりの周三さんと幼稚園に一緒に行く。周三さんの一家は、二十日程前に大阪から越して来たので、周三さんも生粋の大阪言葉である。ある時、周三さんが「仰山、呉れはつた。」と云ふと、恒雄が「仰山つて何に？ 何を呉れやあがつた？」と問ひ返したので傍で吹き出した事がある。兎に角、いゝお友達が出来てしあはせだ。此頃は二人でばかり遊んで、お向うのあとこちやんとは殆ど遊ばなくなつた。あとこちやんも近いうちに、神戸とかに行くのださうだ。一緒に生れて、一緒に育つた三人のうち、よつこちやんは死んで了ふ、あとこちやんも去つて了ふ。彼の周囲も一變した。かうして仲の好くなつて行く周三さんとの間にも、何時、別離がやつて来るか知れない。

出社。「文章俱樂部」の残務。その他、原稿五六枚書く。頭が重くてどうにもやりきれない。N君は今朝鵠沼から出て来た。白い洋服を着て、汽車の回数券などをもつて、大にその所謂「ビジネス・ライク」を發揮してゐる。「郷愁」の最後の校正を社でする。皆で三百十四頁になつた。

明日から三日間赤城さまの祭りといふので、酒井の邸の前に、神樂囃子の小屋掛などが出来て居る。土を有たぬ、傳説といふものを有たぬ、こんなところでの祭禮は妙なものである。私

は、年々淋しくなつて行く故郷の村の鎮守祭などを思つた。

夜、縁に出て、しめつほい庭先の闇を透して、リリ、となく蟲の聲を聞く。秋の深さが思はれる。障子がかさ／＼と鳴るので、何かと見るとカマキリである。濃い、爽かな翅の色が、白い障子にほのかに緑をにじましてゐる。どうするのかと見てゐると、障子を降りて、もの／＼しい様子をして縁側を這つて行つた。寝る前に小川未明氏から頂いた「惱ましき外景」のうち二三篇を読んだ。思ひつめた氣持が、一行一句に張りきつてゐる。久振でしみ／＼と未明氏の小説を讀んでかなり強い感銘を受けた。寢床に入つてからも、妙に今夜は蟲の音が耳につく。じつと耳を濟ましてきいてゐると、遠く近く、彼方でも此方でも無數に鳴いてゐる。中で一番高くリリ、と聽えるのは、庭の八手の樹の下あたりかなと思ふ。いや、手水鉢の邊かも知れないと思ふ。どつちだか、たしかめなければ措けないやうにそれが氣になつて来て、益々眼が冴えて了ふ。神経衰弱だな、と思ふ。うつら／＼としてゐる間に、床の間の壁あたりで、ピ、といふ、小さいけれど高い鋭い鳴聲がきこえ出した。寝てゐるのか覺めてゐるのかわからぬやうな、疲れぼやけた意識の表面に、それが、小さな／＼銀のしづくを一つ／＼滴らすやうに思

はれる。――

九月十七日。曇。出社。いろ／＼の原稿七八枚書く。

けふから赤城神社の祭禮で、酒井の邸の前の棧敷で、神樂がある、太鼓が鳴る。子供等が樽御輿を擔いで騒ぎある。――恒雄もおとなりの周三さんと、萬燈を振り廻してゐたが、二人とも祭りの氣分に溶けこめないらしい。すぐ萬燈を抛り出していつもの遊びに耽つてゐた。

夜、C――學會の仕事をする。投稿の選評である。自分も、少年時代には投書といふ事をよくやつた。それが今してゐるやうな仕事への病附やみつきである。粹が身を喰ふといつたらをかしからう。藝が身を助けるといふのでも勿論あるまい。投書を閲した、隨所に昔の自分を見出す時、私は一寸慚然たらざるを得ない。丁度それが終る頃に、H氏が見える。社の方の或る用件について相談に來られたのである。「早稲田文學」に寄せる小説の校正を一寸見せて貰ふやうにお願いする。あの小説はとつておきの材料だつたが、あまり匆々に書いた爲めに、すつかり失敗して了つたやうである。センチメンタリズムを恣にしすぎたのが氣になるが、しかし、單なるセンチメンタリズムの作品にはなつてゐないやうにも思ふ。どういふものか？ 氣になる。

肩が張つてたまらないので、按摩を呼んだら十時過になつて來た。三十分ばかり揉んで貰ふと、すつかりよくなつた。背中が半分なくなつたやうな氣がする。

九月十八日。曇。出社。「文章俱樂部」殆ど校了。つゞきの原稿、七八枚執筆。頭が重くてどうにもやりきれない。心持が、無暗に憂鬱になる。いろ／＼の事を考へる。いつまでもこんな事をしてゐては仕方が無いと思ふ。

風呂に行く。一人の老人がこんな事を聲高に喋つてゐた。「けふ、神輿がな――町の角で、横にかしいでぐらく／＼したが、今どきの若え者は意氣地がねえ！ 俺なぞがやる時分にやあんな事あ無かつたが――。尤もその筈よ。米が高えんだから、力も無えや。はゝゝゝ。」

どこの老人でも、かういふ事を云ひたがるものだ、と思つて苦笑する。

S氏の招きでN君と晚餐を喰ひに行く。どつちも身體の工合がへんなので出がけに體温を測つて見ると七度六分あつた。十時頃かへる。酒井の邸の前の棧敷では、盛に神樂が踊られてゐる。皆が大勢出て見てゐる。K氏が群集のうしろの方からぼんやりと舞方を見てゐる。屹度、神樂の歌でも考へてゐるんだらう。

## 彼岸過ぎ (大正十二年)

三月廿五日。朝七時起床。一作日からこゝ(修善寺温泉菊屋別亭)に来てゐるのである。一浴、朝食。昨日から着手した「久遠の像」第十七回の稿を繼ぐ。

午餐の給仕をしながら、女中が、おひとり御退屈でせうといふ。どうして、退屈どころか山ほど仕事があるのである。

暖い。うぐひすがしきりに鳴く。

午後「見えぬ太陽」一回書く。四時頃書き終りすぐ傍の郵便局にもつてゆくと、今日は日曜故、書留は午前だけですと若い女事務員がいふ。明日第一の便で出して貰ふやうに頼んで置いて来たが、あとで何となく不安に思ふ。

夕一寸散歩に出る。共同湯から白い湯気がたちのぼり、湯の入口のところ村の人らしいのが五六人、高話をしてゐる。いかにも春の晩らしい感じだ。

夜、「久遠の像」の稿を繼ぐ。「獨逸現代の戯曲」を三十頁ばかり讀む。十一時就寝。どうも、よく眠れない。

三月廿六日。昨日の通り快晴。六時半起床。朝からかゝり、午後三時頃「久遠の像」脱稿。三十枚。郵便局へもつてゆき書留で出す。かへりに理髪する。湯に入つてのぼせるのは、ひとつは、頭髮が伸びたせゐかと思つたからである。

一仕事すんだので、安心して晝寝をする。晝寝をしながら、「新趣味」の探偵小説を讀む。所謂温泉場気分である。

家の者から手紙来る。一寸遊びに来ないかと云つてやつたその返事だ。

夜、「見えぬ太陽」一回書く。「婦人公論」へ書く約束の短篇の腹案をする。三十枚位のものだから、こゝに居るうち書き度いと思ふ。

三月廿七日。朝、修善寺の境内から抜けて、梅林の方へ散歩する。途中蜜蜂園の看板を出した

家があり、随意に御覽下さいと看板に書いてあるので、一寸寄つて見る。おもちやの電車のやうな蜜蜂の家が、十ばかり庭に並んで、その家のまはりを群れ飛びながら、幾百千匹の蜜蜂が、うららかな春の日かげに長閑なうなりを立ててゐる。山の方にのぼつてゆくと、林の中でしきりに鶯が鳴く。短篇の構想をしながら、二三町爪先あがりにあるいて行つたが、梅林といふのはなか／＼遠さうなので、途中から引きかへす。歸りに、本屋へ行つて、「改造」と、「泉」とを買つて来る。「泉」の「骨」といふ小説を読む。面白い。有島さんはいつも若々しく、いつも動いてゐる。矢張、本當にものを書いてゐる人だといふ氣がする。「改造」では、佐藤春夫君のと、菊池寛君のを読む。「義民甚兵衛」は、最近戯曲界に於て最も注意す可き作だらう。自分もやうやく落着いて書いたり讀んだりする事が出来るやうになつたので、これから大いにやらなければならぬと思ふ。今までの事は皆、もとの空白に返して了つて、全く新しくやり直さなければならぬと考へる。

午後、腹案漸くまとまり、短篇を書きはじめる。辛うじて三枚書けただけ。

夜、「見えぬ太陽」一回書く。

三月廿八日。朝七時起床。「改造」の「みなかみ紀行」を読む。若山牧水氏の紀行文は、平常愛讀して措かざるところ。此篇、四十頁に及ぶの大紀行文。例によつて氏の性格美が隨所に見られる。中に挿まれた歌も非常にいゝ。「あめつちのいみじき眺めに逢ふ時しわがもついのちかなしかりけり」など、宛として芭蕉の心境なり。

短篇「黒髪」の稿を綴ぐ。

午睡、讀書、散歩、入浴。執筆の外に、これだけは毎日缺かさぬ日中行事である。「獨逸現代の戯曲」漸く讀了。ハウプトマンといふ作家は、自分の性に合つた作家らしい。此間、讀んだ戯曲集と、このハウプトマン評傳とを思ひ合せると、どうしても自分の好きな作家である。自分の好きな作家——ツルゲエネフ、ビオルンソン、シング、チリコフ、而してハウプトマン。

三月廿九日。すこし曇。昨夜は、すこし仕事をし過ぎたので、神経が冴えて二時頃まで眠れなかつた。

午前中、「黒髪」脱稿。三十一枚。意に滿たないが締切が迫つたので、そのまま送つて了ふ。

「見えぬ太陽」一回書く。此の小説の失敗は、腹案熟せず、機構完からざるに筆を執りたるに

あり。場景に場景を連ぬる行き方よりも、一つの事件をこしらへ、その一事件を中心として、各人物を活躍せしむる行き方をとりしならばよかりしならむと思ふ。出發を誤まりたる爲め、勞徒らに多くして効少なし。一回を書く毎に憂鬱を感ず。

午後四時頃、家の者子供一人つれて来る。

三月三十日。今日も晴。子供をつれて散歩。今日は、執筆を廢して一日遊んで了ふ、知友數氏に繪葉書など書く。K君に、新作短篇の讀後感を書き送る。「詩聖ダンテ」を半分ばかり讀む。故上田敏氏の優麗の筆には、いかにもダンテらしい氣分が出てゐるやうな氣がする。まだ三十にもならないうちに、これだけの研究もし、これだけの文章も書いてゐたのだと思ふと、柳村博士も亦一世の才だと思ふ。

こゝへ來てから丁度一週間になる、明日は歸ることとする。

三月三十一日。細雨煙るが如し。けふ歸るといふのに生憎のことなり。連日の勞作に稍々疲勞。うつら／＼と朝から晝寢をする。午後二時宿を立つ。大仁まで自動車、車上より桃林煙雨に籠りて、紅の靄引けるが如きを眺む。

汽車の中で、「詩聖ダンテ」を読む。品川ぢかくにて讀み了る。子供、「おぶう、おぶう」と云ひながら、帶を解かうとする。湯が氣に入つたと見える。汽車の中で湯にはひらうといふのだから破天荒だ。

八時頃歸宅。留守中に來てゐた手紙などに一通り眼を通して寝る。I君の新著「地獄の出來事」も、机の上に来てゐた。

四月一日。好晴。七時半起床。新潮社に行く。皆休み故、「新潮」と「文章俱樂部」を貰つて歸る。「新潮」の創作月評、自分の作についてのところ殊に注意して讀む。「祭の夜の出來事」は如法の悪作ならむ。しかし、テエマには自信があるのだ。この作、實は五月から「女學世界」に書く長篇の腹案を、他に手頃の材料なかりし爲め、短篇の形にまとめて見たので、具象化の足りないといふ非難は、瘦我慢強き作者と雖も甘受せざるを得ない。

午後「見えぬ太陽」一回書く。

神樂坂の本屋へ行き、「獨逸近代の戯曲」第二巻をとつて来る。早速讀みはじめ。

四月二日。晴。朝K郡の義兄來る。しきりに米相場の話をする。些とも判らず。

出社。「文章俱樂部」の編輯に着手。「惱ましき春」の中に、萩野蘆江の假名を以て描ける少年時代の未見の友、N君の弟といふ人からの手紙が来てゐた。逢ひたいから都合のいゝ日を知らせて呉れとのこと。自分も、逢つて見たい氣がする。M君、来る。午後、S・N君久し振りで來訪、いろ／＼の話をして時を過す。五時頃、S・N君が教へて呉れたので、S・N君と同行、榎町の方の貸家を見にゆく。家賃が高すぎるので、とても駄目さうである。S・N君は、相變らず、物靜かな人だ。昔から知つてゐる人は、何時逢つてもなつかしい氣がする。夜、S君来る。文壇の話その他いろ／＼。

「見えぬ太陽」一回書く。

四月三日。雨、少々寒冷。午前家にありて「文章俱樂部」編輯。「近代劇大系」第四回配本来る。午後、「久遠の像」前號までの梗概三枚半書く。頭工合悪しく、「見えぬ太陽」の一回分とう／＼書けず。H・N君久し振りにて來訪。明後日、晚餐に来て呉れとの事、快諾。F君來訪。F君の長篇「根津権現裏」の讀後感を語る。「根津権現裏」大いに世に著れずと雖も、新進文壇屈指の名篇なるは深く余の信ずるところ。F君、毒舌縦横、しきりに世を罵り、文壇を罵る。蘇峯先生

の口吻を藉りれば、「亦、一個痛快の漢」だ。續いてY・N君来る。F君より話の「女性」へ短篇寄稿の件引受けることにする。

四月四日。晴。新聞の小説今日は休載。昨日書けなかつたので、斷りを云はうとしてゐた處だつたので、助かつた氣がする。朝、K氏來訪。

出社。「文章俱樂部」の編輯に従事する。東京社のK氏來訪。「婦人畫報」へ短篇寄稿の件、すこし忙しいと思つたが、矢張引受けることにする。長篇ばかり書いてゐるので、少し、短篇を書きたい氣がするのである。「夢見る日」増版の分五百捺印。

郷里の父、此間うちから歸省してゐた子供二人を連れて来る。これで、子供等皆揃ひ、再び動物園のやうな賑かさになる。

頭悪く、小説の構想まとまらず。ぼんやり神樂坂の方に散歩に出ると、ばつたりとM・N君に逢ふ。オザワで珈琲を呑みながら、小説の事その他いろ／＼の話をする。夜、「見えぬ太陽」一回書く。

四月五日。曇。小雨。寒冷。長女と次女とを、今日より幼稚園へやる。支度にて朝一と騒動。

社へ行く途中の或る家の庭の木蓮の花ももう散り際也。薄藍色の早春の空に、爛銀の大輪を連ねて、放膽なる白日の夢を描ける如き此の花の風情は、余の最も愛するところである。例により午前出社。「文章倶楽部」の編輯に従ふ。

午後三時頃K君來訪。連れ立って市外駒澤にH君の新居を訪ふ。T.K氏、A.M氏をはじめ彫刻家のH氏、書肆のM.F氏などがゐた。飲み且つ語りつゝ、一夜の清興をやる。十時頃辭す。雪がちら／＼散つてゐた。午前二時頃までかゝり、「見えぬ太陽」一回書く。

—了—



大正十三年十月十日印刷  
大正十三年十月十五日發行

(定價壹圓貳拾錢)

《我が小畫板》

著作者 加藤 武雄  
 發行者 東京市牛込區矢來町三番地 佐藤 義亮  
 發行所 東京市牛込區矢來町三番地 新潮社  
 電話牛込 八八八〇六番  
 八〇〇八七番  
 八〇〇九八番

番二四七一(京東)藝振

印刷所 東京市麹町區飯田町二ノ五〇番 電話四谷六一三〇番 印刷者 猪木卓二社



感想小品叢書

- |     |       |          |
|-----|-------|----------|
| (1) | 我が文藝陣 | 菊池 寛氏著   |
| (2) | 泉のほとり | 正宗白鳥氏著   |
| (3) | 微笑藝術  | 久米正雄氏著   |
| (4) | 七寶の柱  | 泉 鏡 花氏著  |
| (5) | 草 原   | 武者小路實篤氏著 |
| (6) | 白醉亭漫記 | 里 見 弴氏著  |
| (7) | 文學的散步 | 宇野浩二氏著   |
| (8) | 百 艸   | 芥川龍之介氏著  |

一冊一圓二錢十送料八錢

■加藤武雄氏著作目録■

- |        |       |       |                 |
|--------|-------|-------|-----------------|
| (短篇集)  | 郷 愁   | (品切)  | 價壹圓五拾錢<br>送料拾錢  |
| (短篇集)  | 夢見る日  | (十三版) | 價壹圓拾錢<br>送料八錢   |
| (短篇集)  | 處女の死  | (十版)  | 價壹圓拾錢<br>送料八錢   |
| (短篇集)  | 幸福の國へ | (五版)  | 價壹圓四拾錢<br>送料八錢  |
| (長篇小説) | 悩ましき春 | (九版)  | 價貳拾錢<br>送料拾錢    |
| (長篇小説) | 久遠の像  | (六版)  | 價貳拾錢<br>送料拾錢    |
| (長篇小説) | 東京の顔  | (八版)  | 價貳圓八拾錢<br>送料拾貳錢 |
| (中篇小説) | 都會へ   | (七版)  | 價七拾錢<br>送料六錢    |
| (感想集)  | 我が小畫板 | (近刊)  | 價壹圓貳拾錢<br>送料八錢  |

— 新 潮 社 出 版 —

志賀直哉	久米正雄	武者小實篤	菊地 寛	芥川龍之介	島崎藤村	吉田絃二郎	藤森成吉	加能作次郎	江馬 修	生田春月	吉屋信子
暗夜行路	破船 <small>(全二冊)</small>	彼の結婚と其後	眞珠夫人	傀儡師	家	無	若き日の悩み	小夜子	暗礁	相ひ寄る魂	地の果まで
祖父と母との不倫の關係に生を得た一青年の暗い運命の影を描いた作者の痛切な極めた失戀の自傳小説で一面深刻なる心理小説である	作者自身の結婚を材とせる切の戀物語と其の後の生活の記録父の仇敵に嫁して其純潔を許さず遂に悶死せしめ其の終始を描く	戯三昧、地獄變以下十一篇。寶玉の光輝燦たる氣品高き名作の集	實と量と明洋文壇第一の大作にして、恐らくは不朽に傳ふ可きもの	三人の兄弟の生活を材とし、人間愛の哀しみを抒べたる長篇小説	多感の青年と島乙女との戀を中心となし若き日の悩みを描ける名作	若く美しくしき文學志望の女性性が誘惑に一步步々墮落し行く徑路	戀愛、結婚、夫婦關係等の幾問題によつて起れる悲劇を描ける大長篇	全三卷。二千百枚の長篇小説。現下の新らしき日本の全局を描いた	興味極めて多く而も藝術味豊かな名作にして吉屋女史の出世作也		
三三〇	二七〇	二〇〇	一八〇	一六〇	一三〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	二五〇	二五〇

銀位單 料送は左 價定は右

[Redacted]

✓

2

新潮社版